

対人感受性尺度の作成¹⁾

—因子構造と信頼性, 妥当性の検討—

江田 早紀²⁾
日高 三喜夫³⁾

要 約

本研究の目的は, 対人感受性尺度を作成し, その信頼性と妥当性を検討することである。大学生338名を対象に仮尺度について因子分析を行った結果, 第1因子「否定的感受性」因子(27項目, $\alpha = 0.94$), 第2因子「肯定的感受性」因子(12項目, $\alpha = 0.91$)の2因子39項目を抽出した(累積説明率42.8%)。さらに, 再テスト法により, 相関係数を算出した結果, 第1因子「否定的感受性」因子は $r=0.83$, 第2因子「肯定的感受性」因子は $r=0.70$ とそれぞれ強い正の相関が見られた。また, 日本語版社会的スキル尺度(榎野, 1988)を用いて, 作成した尺度の併存的妥当性を検討した結果, 情緒的感受性尺度との相関係数が $r=0.44$, 社会的感受性尺度との相関係数が $r=0.54$ であり, いずれも中程度の相関が見られた。今後の課題としては, 被検者を増やし, 様々な年齢層を対象に調査を行うことにより, 本尺度の信頼性および妥当性をさらに高めること, 尺度の得点範囲について厳密な範囲設定を行うことなどが挙げられる。

キーワード: 対人感受性, Interpersonal Sensitivity, 因子構造, 信頼性, 妥当性

はじめに

対人関係における感受性の研究は, 臨床心理学, 社会心理学, 教育心理学, 児童心理学, 認知心理学, 学習心理学など幅広い分野で行われている。中でも, 臨床心理学の分野においては, 社会的不適応に働く感受性についての研究が行われ, 過敏さや敏感さといった被影響性が精神的な健康に及ぼす影響について検討されている(三好, 1999)。

このような他者の言動, 状態などに対して感じやすい個人性質をセンシティブティ・パーソナリティという。三好(1999)によると, センシティブティ・パーソナリティは, 社会的な事象や環境, 対人関係などに必要以上に敏感な性格傾向である。このセンシティブ

ティ・パーソナリティに関する研究, いわゆる Interpersonal Sensitivity の研究は, 諸外国において, 近年盛んに行われている。その代表的な研究に Boyce & Parker (1989) の研究がある。Boyce & Parker (1989) は, Interpersonal Sensitivity を「他者に関する過度で極端な気づきと他者の行動および感情への感受性」と定義しており, それは他者の対人的な行動に関する不適切感や, 誤った解釈によって特徴付けられ, それによって対人的な回避や他者に対する不安を生じるものであるとしている。

Boyce & Parker (1989) は, Interpersonal Sensitivity が抑うつと関連していると考え, Interpersonal Sensitivity Measure (以下 IPSM) を作成し, うつ傾向との関連性について検討している。IPSM は,

1) 本論は久留米大学大学院心理学研究科修士論文(2006)の一部を加筆修正したものである。

2) 久留米大学大学院附属心理教育相談室助手

3) 久留米大学文学部

他者による社会的な反応や否定的評価などの、他者の対人的行動への過度の感受性を測定するための尺度であり、項目については、臨床的観察、他のパーソナリティ目録、理論的仮説から73項目が抽出されている。IPSMは、それらを因子分析にかけた結果得られた4因子36項目から構成される尺度である。

IPSMには、i) Awareness (7項目;「私は他の人々がもつ印象について心配である」など)、ii) Need for Approval (8項目;「私は親しい誰かを喜ばせるだろう」など)、iii) Separation Anxiety (8項目;「私は人と別れる時に不安を感じる」など)、iv) Timidly (8項目;「私は誰かを怒らせたり、狼狽させるよりもしたくもないことをするだろう」など)、v) Fragile Inner Self (5項目;「私の人としての価値は、私のことを他者がどう思っているかによる」など)の5つの下位尺度がある。

このIPSMは、特にうつ傾向のパーソナリティの査定とその進行、再発の兆しを測る尺度として研究が行われ、また様々な研究に用いられてきたが、近年では社会不安障害の患者を対象にした、その心理測定的適用に関する研究にも用いられており、既存する様々な尺度との妥当性も証明されている (G.C.Harb, R.G.Heimberg, D.M.Fresco, F.R.Schneier, M.R.Liebowitz; 2001)。

しかし、日本においてはIPSMなどの、他者への感受性に関する尺度を用いた研究は、数少ない。桑原ら (1999) は、Boyce & Parker (1989) のIPSMを日本語に翻訳し、日本語版IPSMを作成したが、内的整合性および判別妥当性しか検討されておらず、併存的妥当性や因子妥当性について検討していないことを問題点として挙げている。

感受性は時には社会的な不適応をもたらすものであり、さらに、うつ病やうつ傾向、種々の不安障害の一要因となると思われる。また、他者に対する低すぎる感受性は、何らかの対人関係上の困難を起こす可能性があると考えられる。先行研究を概観してみると、他者への感受性の高さと、うつ病やうつ傾向、種々の不安障害との関連について検討している研究は多く、いずれも関連が見出されているが、佐藤 (1990) の言う、感じやすい心を人間関係の望ましい方向に発展させることに繋がるような、つまり適度な感受性について言及した研究は、未だなされていない。

そこで、本研究では、他者への適度な感受性に焦点を当て、Interpersonal Sensitivityを対人感受性と訳し、その定義を「他者の言動、状態に関する過度の敏

感さと被影響性」とし、対人感受性尺度を作成し、その因子構造と質問紙の信頼性、妥当性を検討していく。

目 的

Boyce & Parker (1989) の作成した、IPSMをもとに桑原ら (1999) が作成した日本語版IPSMに、新たに必要であると思われる項目を加え、対人感受性尺度を作成する。

方 法

①予備調査

2005年6月末から7月にかけて、大学生73名を対象に、対人感受性尺度を作成するための予備調査を実施した。「他者を理解する際に、他者のどこを見るか」について、自由記述によって答えてもらい、回答内容をKJ法により分類し、50項目を選定した。

②本調査

調査対象は、大学生・大学院生331名。また、調査は2005年9月中旬、および2005年11月に行った。

質問紙

a) 対人感受性尺度

Boyce & Parker (1989) の作成したIPSMをもとに桑原ら (1999) によって翻訳、作成されたIPSM日本語版36項目に、予備調査によって得られた50項目を新たに追加し、計86項目から成る対人感受性尺度を作成した。項目の内容は、「他の人が自分を拒絶しているのではないかと不安になる」、「他の人の口調が穏やかでない」と不安になる、「人が自分に対して好意的な態度であると安心する」など、他者の言動や態度に対する過敏さ、またそれによって個人が受ける影響およびそれらに対する個人の反応性を表わすものである。回答については、「1:全く当てはまらない」、「2:少し当てはまる」、「3:当てはまる」、「4:非常に当てはまる」のリッカート法による4件法で行う。なお、対人感受性はパーソナリティ特性であることから、回答者には、普段の自分について最もよく当てはまるものを選ぶように教示した。

b) Social Skills Inventory (以下 SSI) 下位尺度、情緒的的感受性尺度 (15項目) と社会的感受性尺度 (15項目)

社会的な能力を測定するため、Riggio (1986) によって作成されたSSIを榎野 (1988) が翻訳、作成

した日本語版社会的スキル尺度（全90項目）の下位尺度、情緒的感受性尺度（15項目）と社会的感受性尺度（15項目）を用いる。全30項目について、「1：全く当てはまらない」、「2：当てはまらない」、「3：どちらでもない」、「4：当てはまる」、「5：非常に当てはまる」の5件法で回答してもらう。

結 果

尺度を作成するにあたり、平均値±1SDの値が、尺度の上限値である4を越えるもの、および、尺度の

下限値である1を下回るもの、計8項目を除外した。

1. 因子構造について

質問項目78項目に対して、最小二乗解、バリマックス回転による因子分析を行い、因子負荷量が0.40以下の項目を削除した。さらに、最小二乗解、バリマックス回転による因子分析を行ったところ、表1に示す2因子、39項目が抽出された（累積説明率42.8%）。

まず、第1因子には、「人が自分を拒絶しているのではないかと不安になる」、「自分の言動について批判

表1 対人感受性尺度の因子分析結果

	Factor1	Factor2	共通性
56. 人が自分を拒絶しているのではないかと不安になる	0.762	0.094	0.589
19. 自分の言動について批判されているのではないかと、いつも気にしている	0.761	0.168	0.607
20. 他の人の性格とうまくやっっていけるかどうか、気に病む	0.734	0.076	0.544
6. 他の人の表情に自分に対する嫌悪感があるのではないかと、と恐れている	0.721	0.082	0.526
68. 他の人の表情に自分に対する怒りがあるのではないかと、不安になる	0.719	0.248	0.578
40. 他の人は自分に関心を持っていないのではないかと気に病む	0.709	0.117	0.517
65. 他の人の気持ちを害するのではと心配している	0.669	0.263	0.517
34. 他の人が自分にとってどういう立場の人か、いつも気にしている	0.657	0.048	0.435
84. 人が自分との距離を適切に保って接しているか、いつも気になる	0.654	0.114	0.440
72. 人が自分と真剣に話をしていないのではないかと不安になる	0.630	0.105	0.408
14. 相手が信頼できる人かどうかと、不安になる	0.626	0.130	0.408
42. 人が周囲の人々とどのように関わるか、気にする	0.612	0.262	0.443
23. 親しい人を失うのではないかと心配する	0.606	0.090	0.375
2. 他の人の自分との距離の取り方が適切でない、不安になる	0.600	0.055	0.364
3. 自分が他の人に及ぼす影響について気に病む	0.592	0.089	0.358
57. 他の人は私を理解していないと感じる	0.588	0.045	0.348
4. 他の人の視線がどこに向いているか、気になってしまう	0.584	0.260	0.408
18. 他の人の口調が穏やかでないと落ち着かない	0.583	0.274	0.415
10. 人がどんな人と仲良くしているのか気になる	0.571	0.114	0.339
55. 他の人に動揺させられると、簡単に忘れることができない	0.562	0.260	0.383
9. 他の人が本当の私を知ったら、私のことを好きにならないだろう	0.560	-0.020	0.314
43. 他の人を非難するのではないかと心配する	0.541	0.057	0.296
61. 知り合いが誉めてくれないと、幸せな気分になれない	0.495	0.238	0.302
5. 拒否されるのを恐れて、自分の考えを言うのを避ける	0.457	0.184	0.243
29. 他の人がほめてくれないと、自分が良いことをしたと信じられない	0.438	0.276	0.268
13. 他の人を傷つけるのではと恐れて、腹を立てない	0.422	0.096	0.188
85. 異性と接するとき、動揺してしまう	0.401	0.111	0.173
78. 人が明るい雰囲気だと安心する	0.083	0.787	0.626
83. 人の話し方が明るい、と、安心する	0.063	0.786	0.622
64. 人が自分に対して好意的な態度であると安心する	0.141	0.768	0.609
73. 他の人の返答の仕方が優しいと安心する	0.207	0.764	0.627
60. 他の人の表情が明るい、と、嬉しくなる	0.120	0.733	0.552
38. 他の人の声の感じが明るい、と安心する	0.168	0.708	0.529
44. 他の人が話しやすいと安心する	0.178	0.689	0.506
50. 人が近づきやすい雰囲気だと安心する	0.217	0.679	0.508
16. 人が優しそうな顔をしていると安心する	0.103	0.671	0.461
74. 他の人の表情が寂しそうだ気になる	0.259	0.510	0.328
11. 他の人と親しい関係にあると、安心する	0.182	0.505	0.288
15. 友達と喧嘩した後は、仲直りするまで落ち着かない	0.261	0.416	0.241
説明分散	10.419	6.266	16.686
説明率	26.7	16.1	42.8
α係数	0.94	0.91	0.89

されているのではないかと、いつも気にしている」、
「他の人の性格とうまくやっていけるかどうか、気に
病む」、
「他人の表情に自分に対する嫌悪感があるの
ではないかと恐れている」、
「他の人の表情に自分に対する
怒りがあるのではないかと、不安になる」などの27
項目が高い負荷を示した。これらの項目は、他者対
する不安や気がかり、恐れなどを示すことから「否
定的感受性」因子と命名した。

さらに、第2因子には、「人が明るい雰囲気だと安
心する」、
「人の話し方が明るい」と安心する」、
「人が自
分に対して好意的であると安心する」、
「他の人の返答
の仕方が優しいと安心する」などの12項目が高い負
荷を示した。これらの項目は、他者と接する際に、相
手の態度や言動等を見て、安心を感じるという側面を
示すことから、「肯定的感受性」因子と命名した。

2. 対人感受性尺度得点の度数分布

次に、対人感受性尺度得点の度数分布をヒストグラ
ムにし、図1に示した。

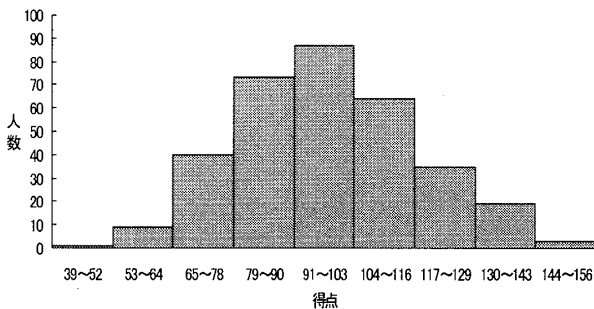


図1 対人感受性尺度得点の分布

図1を見ると91~103点を中心として、正規分布し
ていることがわかる。

3. 信頼性の検討

a) クロンバックの α 係数による検討

クロンバックの α 係数を求めたところ、第1因子
「否定的感受性」因子が $\alpha=0.94$ であり、第2因子
「肯定的感受性」因子が $\alpha=0.91$ であった。さらに、
対人感受性尺度項目全体の α 係数を求めたところ、 $\alpha=$
 0.89 であった。

b) 再テスト法による検討

再テスト法は、ある一定の期間において同じ集団に
テストをすることによって、前後のテスト結果の相関

係数を信頼性係数の推定値とするものである。本研究
では、初回の質問紙の試行を2005年9月下旬、2回目
の試行を2005年10月中旬に行った。前後のテストをど
ちらも回答した被験者を対象とするため、初回のみ回
答した被験者および2回目のみ回答した被験者を分析
から削除したところ、有効な被験者は100名であった。

因子ごとと、各因子の合計点である総得点について、
1回目と2回目の間でピアソンの相関係数を算出した。
結果を表2に示す。

表2 再テスト法による相関係数

	相関係数
否定的感受性因子	0.834
肯定的感受性因子	0.702
総得点	0.825

否定的感受性因子は $r=0.83$ 、肯定的感受性因子は
 $r=0.70$ と強い正の相関が見られた。また、各因子の
総得点においても、 $r=0.82$ となり、同じく強い正の
相関が見られた。

4. 妥当性の検討

対人感受性尺度の併存的妥当性を測るため、SSIの
下位尺度である情緒的感受性尺度(15項目)および社
会的感受性尺度(15項目)と対人感受性尺度について、
ピアソンの相関係数を求めた。SSI下位尺度の平均値
と標準偏差を表3に、対人感受性尺度とSSI下位尺
度との相関係数を表4に示す。

表3 SSI下位尺度における平均値と標準偏差

	平均値	SD
情緒的感受性	42.24	7.02
社会的感受性	50.94	5.87

表4 対人感受性尺度とSSI下位尺度の相関

	SSI 情緒	SSI 社会	否定的	肯定的	総得点
SSI 情緒	—				
SSI 社会	0.35	—			
否定的	0.19	0.48	—		
肯定的	0.17	0.48	0.46	—	
総得点	0.44	0.54	0.95	0.72	—

考 察

1. 因子構造の検討

まず、第1因子「否定的感受性」因子には、他者の
態度や言動に対して過度に敏感になり、それによって

不安を感じたり、恐れを感じるという内容の項目が含まれている。また、第2因子「肯定的感受性」因子には、他者の態度、言動に対して過度に敏感にはなるが、その他者の態度や言動が個人に恐れや不安を与えるものではなく、安心感を与えるものが含まれている。このことから、これらの因子は、内容的にはどちらも他者の態度、言動に対する過敏さと、被影響性を表わしていると考えられる。

次に、因子の独自性についてであるが、第1因子に含まれる項目の因子負荷量は、0.40~0.76、第2因子に含まれる項目の因子負荷量は0.42~0.79と、いずれの項目についても0.40以上の因子負荷量が示された。よって、第1因子および第2因子に含まれる項目は、各因子と中程度の関連もしくは強い関連があることが示唆された。また、第1因子に含まれる項目の共通性は0.173~0.607で、第2因子に含まれる項目の共通性は、0.241~0.626であることから、第1因子および第2因子に含まれる項目は、各因子によって説明することができると言えよう。

2. 信頼性について

クロンバックの α 係数は、第1因子「否定的感受性」因子が $\alpha=0.94$ 、第2因子「肯定的感受性」因子が $\alpha=0.91$ 、対人感受性尺度項目全体の α 係数は、 $\alpha=0.89$ であり、第1因子、第2因子、および尺度全体についても α 係数が高いことから、対人感受性尺度は、十分に信頼でき、内的整合性が高いといえる。

さらに、再テスト法によると、1回目と2回目の間でピアソンの相関係数を算出した結果、第1因子は $r=0.83$ 、第2因子は $r=0.70$ と強い相関が見られ、各因子の総得点についても $r=0.82$ と、強い相関が見られた。これらのことから、対人感受性尺度には、一定の期間を措いても回答に安定性があることが示された。

3. 妥当性について

対人感受性尺度の併存的妥当性を測るため、情緒的感受性尺度(15項目)および社会的感受性尺度(15項目)と対人感受性尺度について、ピアソンの相関係数を求めたところ、情緒的感受性尺度と対人感受性尺度との相関は、 $r=0.44$ 、社会的感受性尺度と対人感受性尺度との $r=0.54$ であり、情緒的感受性尺度および社会的感受性尺度のいずれについても対人感受性尺度との中程度の相関がみられた。

情緒的感受性尺度には、「私はまわりの人々の持つ雰囲気非常に影響を受けやすいです」、「私は批判に

大変敏感です」などの項目が含まれ、社会的感受性尺度には、「私ほど感受性が高く、理解力のある人はいないと思います」、「私は初対面の人の性格を正確に判断することができます」などの項目が含まれる。

梶野(1988)によると、情緒的感受性は、主に非言語的情報を媒介として他者の情緒の状態や信念や態度や地位を解釈する技能であり、社会的感受性は、主に言語的情報を媒介とした知識や社会的規範を解釈する社会的技能であるという。このことに加え、質問項目の内容からも、情緒的感受性尺度および社会的感受性尺度と対人感受性尺度にはある程度のある関係があると考えられるが、対人感受性が他者の態度や言動に対する過度の敏感さ、および被影響性を測定するものであるのに対して、SSIでは、情緒的感受性および社会的感受性をスキルとして測定している点において、SSI両下位尺度と対人感受性尺度には基本的な相違があるために中程度の相関がみられたと考えられる。しかし、中程度の相関が得られたことから、対人感受性尺度の併存的妥当性が検証されたと言え、また対人感受性尺度が感受性を測る尺度であることが示されたと言える。

今後の課題

今後の課題としては、被験者を増やすことによって、本尺度の信頼性、妥当性をさらに高め、より精度の高い尺度を作成することが必要であろう。また、今回対象は大学生であったが、対人感受性の諸側面を考慮すると、思春期、青年期は自己への関心が高まると同時に、他者への関心が高まり、対人感受性が高まる時期ではないかと考えられる。様々な年齢層を対象に調査を行うことで、年齢層によって、対人感受性の高さが異なるかどうかについても、検討の余地があるだろう。

また、どのくらいの得点範囲に入れば、適度な感受性を持っているのか、高すぎると考えられるのかといった対人感受性尺度得点範囲についての範囲設定も行う必要がある。さらに、先行研究、および本研究でもその関連性が示唆された、うつ病や不安障害などの精神疾患との関連性を検討するために、臨床群を対象として調査を行い、より信頼性、妥当性共に高い尺度を作成したい。

引用・参考文献

- Bennazzi, F. (2000) Exploring aspects of DSM-IV interpersonal sensitivity in bipolar II. *J Affect Dis* 60(1): 43-46.
- Boyce, P. & Hickie, I. & Parker, G. (1991) Par-

- ents, partners or personality? Risk factors for post-natal depression. *J Affect Dis* **21**(4) : 245-255.
- Boyce, P. & Mason, C. (1996) An overview of depression-prone personality traits and the role of interpersonal sensitivity. *AustNZ Psychiatry*, **30**(1) : 90-103.
- Boyce, P. & Parker, G. (1989) Development of a scale to measure Interpersonal Sensitivity. *Aust NZ Psychiatry*, **23** : 341-351.
- Boyce, P. & Parker, G. & Barnett, B. & Cooney, M. & Smith, F. (1991) Personality as a vulnerability factor to depression. *The British Journal of Psychiatry*, **159** : 106-114.
- Davidson, J. & Zisook, S. & Giller, E. & Helms, M. (1989) Symptoms of interpersonal sensitivity indepression, Department of Psychiatry, Duke University Medical Center, Durham.
- Harb, G.C. & Heimberg, R.G. & Fresco, D.M. & Schneier, F.R. & Liebowitz, M.R. (2002) The psychometric properties of the Interpersonal Sensitivity Measure in social anxiety disorder. *Behavior Research and Therapy*, **40** : 961-979.
- Judith, A. Hall. & Franck, J. Bernieri (2001) *Interpersonal Sensitivity Theory and Measurement*. LAWRENCE ERLBAUM ASSOCIATES, PUBLISHERS, London.
- 梶野 潤 (1988) 社会意的技能研究の統合的アプローチ (I) — SSI の信頼性と妥当性の検討 関西大学大学院人間科学 : 社会学・心理学研究 **31** : 1-16.
- 桑原秀樹 坂戸 薫 上原 徹 坂戸美和子 佐藤哲哉 染矢俊幸 (1999) Interpersonal Sensitivity Measure (IPSM) 日本語版の作成—信頼性と妥当性の検討— *精神科診断学* **10** : 333-341.
- Luty, S.E. & Joyce, P.R. & Mulder, R.T. & Sullivan, P.F. & Mckenzie, J.M. (2002) The interpersonal sensitivity measure in depression: association with temperament and character. *J Affect Dis* **70**(3) : 307-312.
- 村上吉男 (1986) 感受性試論 新潟大学教養部研究紀要 **17** : 1-31.
- 菅 千索 (1990) 心理学研究からみた感受性 *児童心理* **44** : 140-143.
- 佐藤修策 (1990) 感じやすい心をもつ子ども *児童心理* **44** : 11-17.
- Snodgrass, S.E. & Hecht, M.A. & Ploutz-Snyder, R. (1989) Interpersonal sensitivity: expressivity or perceptivity? *Compr Psychiatry*, **30**(5) : 357-268.
- Wilhelm, K. & Boyce. P. & Brownhill, S. (2004) The relationship between interpersonal sensitivity, anxiety disorders and major depression. *J Affect Dis* **79**(1-3) : 33-41.

Development of the new version of the Interpersonal Sensitivity Measure — The examination of factor structure, reliability and validity —

SAKI KODA (*Psychological Clinic of the Graduate School of Department of Kurume University*)

MIKIO HIDAKA (*Department of Psychology, Faculty of Literature, Kurume University*)

Abstract

The purpose of this research was to create the new version of the Interpersonal Sensitivity Measure, and to investigate its reliability and validity. As a result of factor analysis of the temporary measure for 338 college students, the two factor was extracted (39 items, 42.8% of the rates of accumulation explanation). Factor 1 is “negative sensitivity” (27 items, $\alpha = 0.94$), and Factor 2 is “positive sensitivity” (12 items, $\alpha = 0.91$). Furthermore, in order to examine reliability, the re-testing method was performed. As a result of the re-testing method, the positive correlation was obtained (Factor 1 is $r = 0.83$, Factor 2 is $r = 0.70$). And, in order to examine the coexistence-validity of the created measure, the Japanese version Social Skills Inventory (Kayano, 1988) was used. It was proved that the created measure is one with coexistence-validity. A future assignment is to increase subjects and to examine various age groups, and improve this measure further. And also it is important to setup for strict about the score range of a measure.

Key words: Interpersonal Sensitivity, factor structure, reliability, validity

